

O3-049

子どもにおける食品群別摂取量の推移：
2001-2019年国民健康・栄養調査より

新杉 知沙、瀧本 秀美

¹国立研究開発法人 医薬基盤・健康・栄養研究所

【目的】

子どもの健やかな発育のためには、幼少期からバランスの良い食生活が重要である。成人を対象とした食品群別摂取量の年次推移では、菓子類や嗜好飲料類の増加や果物類の減少等が報告されており、食事を共にする子どもにおいても食生活の偏りが懸念されるが、子どもにおける年次推移は不明である。そこで本研究は、子どもにおける食品群別摂取量の年次推移を明らかにすることを目的とした。

【方法】

2001年から2019年までの国民健康・栄養調査の公開データを用いて、1-19歳（1-6、7-14、15-19歳の3区分）の37,072名を対象とした。食事摂取量は、世帯案分・半秤量記録法（1日分）を用いて推定した。食品群別摂取量（穀類、いも類、砂糖・甘味料類、豆類、種実類、野菜類、果物類、きのこ類、藻類、魚介類、肉類、卵類、乳類、油脂類、菓子類、嗜好飲料類、調味料・香辛料類）の傾向は、Joinpoint Regression Programを用いて解析し、年平均変化率（Annual Percentage Change, APC）を求めた。

【結果】

いも類、砂糖・甘味料類、果物類（APC：-5.42～-2.35）、藻類（APC：-23.75～-1.35）、魚介類（APC：-3.11～-1.87）、卵類、乳類、油脂類、菓子類は減少傾向を示し、肉類（APC：0.96～2.88）および嗜好飲料類（APC：1.35～3.70）は増加傾向がみられた。穀類、豆類、種実類、野菜類、きのこ類は少しの例外を除いて変化がみられず、調味料・香辛料類は年齢群により増加（2008年頃まで）及び減少（2016年頃以降）両方の傾向がみられた。

【結論】

子どもにおける食品群別摂取量は、全体的に多くの食品群で減少傾向を示したが、一部の食品群では横ばいまたは増加していた。特に、肉類では増加傾向を示し魚介類では減少傾向がみられたことは成人と同様の傾向であった。今後も食事摂取量を継続してモニタリングしていくことは重要であり、また政策立案者が各食品群の子どもの目標値を検討・設定できるようにさらなる研究の蓄積が求められる。

O3-050

アイトラッキング法を用いた
小児期の食物嗜好の評価木村 真司¹、福岡 理英²、花木 啓一³¹岡山県立大学²島根大学研究・学術情報本部 地域包括ケア教育研究センター³鳥取県立厚生病院

【目的】

小児期の食行動は個人差が大きく、その偏りは肥満発症の要因のひとつとされる。そこで、アイトラッキング法（視線計測）を用い、小児が意識的に特定の嗜好を回答するなどの測定バイアスを低減した評価方法を採用することで、小児の無意識下での食物嗜好の特徴を明らかにし、食事への関心（イラスト選択法）や体格の各指標との関連を検討することを目的とした。

【方法】

小学校に通学する9～12歳の小児18名（男子11名、女子7名）を対象とした。①食物嗜好：36種の食品イラスト画からなるパネルをモニター上に1分間表示し、アイトラッキング機器（Tobii Pro フュージョン60Hz）により測定した各食品への注視時間（秒）、注視回数（回）を食物嗜好の指標とした。②食事への関心：イラスト選択法により小児の身近対象物36個（10種は食品、26種は食品以外）から食後に任意の10個を選択させ、含まれる食品数を食事への関心スコアとした。③肥満度：身長・体重の測定値と性別年齢別身長別標準体重値より算出した。

【倫理的配慮】

岡山県立大学倫理委員会の承認を得て実施した（23-09）。

【結果】

対象の肥満度は $0.6 \pm 14.2\%$ で有意な男女差は認めなかった。1) 食物嗜好：「コーンスープ」「フライドポテト」の注視時間は、男子より女子で有意に高値を示した（ 0.62 ± 0.43 vs 1.65 ± 1.30 , 1.04 ± 1.58 vs 1.47 ± 0.48 , $p < 0.05$ ）。「コーンスープ」「フライドポテト」「刺身」の注視回数は、男子より女子で有意に高値を示した（ 2.82 ± 1.94 vs 7.29 ± 4.19 , 4.91 ± 6.44 vs 6.86 ± 1.86 , 6.45 ± 3.73 vs 10.86 ± 4.41 , $p < 0.05$ ）。2) 食事への関心と食物嗜好の関連：食事への関心スコアは、「ケーキ」「ジュース」「飴」「親子丼」「揚げ物」の注視時間と、「ステーキ」「親子丼」「白米」「揚げ物」の注視回数と、それぞれ有意な負の相関を示した（ $p < 0.05$ ）。3) 体格指標と食物嗜好の関連：肥満度と「お茶」注視時間は有意な正の相関を示した（ $\rho = 0.51$, $p < 0.05$ ）。

【考察】

小児の無意識下でも食物嗜好には男女差が存在することが明らかになった。無意識下での食物嗜好の一部は、食事への関心や体格指標とも関連しており、今後、より詳細な検討が必要である。